

バーミヤーン石窟壁画と年代について

宮治 昭

名古屋大学大学院文学研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel: 052-789-2224 Fax: 052-789-2272
e-mail: kalpama@lit.nagoya-u.ac.jp

はじめに

バーミヤーンは、アフガニスタンの中央を横切る、ヒンドークシュ山脈の山中にある一大仏教遺跡である。インドから中央アジア、中国へ、さらには韓国や日本への仏教美術の伝播を考える上で、バーミヤーンは拠点的な重要性をもった遺跡といえる。

バーミヤーン遺跡は、(1)およそ 1.5km にわたって続く断崖に、東西の二大仏 (図 2) と 750 ほどの石窟がある主崖窟 (図 1)、(2)西南に位置するフォラディ石窟 (30 ほどの石窟がある)、(3)東南に位置するカクラク石窟 (80 ほどの石窟がある) の 3 つの石窟群から成っている。かつてはバーミヤーンに王城や地上の伽藍もあったことが玄奘の記録からわかるが、その遺構は未だ発掘されていない。石窟以外には、僅かに主崖窟の東方部にストゥーパの残骸があるのみである。

2001 年 3 月 13 日に、バーミヤーンの大仏は、イスラム原理主義タリバンによって破壊されてしまった。2002 年 10 月にユネスコの視察団の一員として、私は現地を訪れたが、東西の二大仏はともに完全に破壊され、その残骸が大仏を覆っていた仏龕の下にうず高く堆積していた (図 3)。二大仏の仏龕の天井に描かれていた素晴らしい壁画も、悉く消失してしまった。

バーミヤーン主崖窟には二大仏のほかに、三つの坐仏龕、および約 750 の石窟群がある。そのうちの約 1 割の石窟は、興味深い石窟構造をもち、かつては壁画や塑像で飾られていた。1970 年代には、そのうち 25 ほどの石窟に美しい壁画が残されていた。また、カクラク石窟には高さ 6.4m の大仏 (これも破壊された) と 80 ほどの石窟があり、その中の 1 つの窟 (第 43 窟) はほぼ全面に美しい壁画が施されていた。その壁画はフランス隊によって切り出され、ギメ美術館とカーブル博物館に分蔵された。一方、フォラディ石窟には 30 ほどの石窟があり、そのうちの 4 つの石窟には壁画がかなりよく残っている。

筆者は 1969 年、および 1974、76、78 年と計 4 回にわたって、バーミヤーンの美術史的調査を行う機会をもち、壁画の残存する石窟を中心に詳しく調査し、研究を行ってきた。

日本政府はバーミヤーン遺跡の重要性に鑑み、また日本の古代文化との関わりも深いことから、破壊された遺跡の保存修復に対して、ユネスコを通して全面的に支援することを表明した。これを受けてユネスコは現状把握の視察団を派遣し (2002 年 10 月)、その報告をもとに、日本、イタリア、ド

イツが分担して保存修復を行うプロジェクトが立ち上げられた。

日本は壁画を有する石窟の緊急保全と遺跡全体の地図の作成、イタリアは崩壊の危険のある東大仏周辺の摩崖の保全、ドイツは崩壊した二大仏の彫像残骸の整理保全を担当することになり、2004年から作業が行われている。日本は独立行政法人・東京文化財研究所が中心となり、上記の作業を行っているが、その過程で、石窟に描かれた壁画の下壁の中からスサ（麦わら）が採取された。

東京文化財研究所は名古屋大学博物館と契約を結び、同博物館（足立守館長）の依頼によって、名古屋大学年代測定総合研究センターがその試料を測定することになった。今回、東京文化財研究所の人たちによって採取された第1回目の試料は、バーミヤーン主崖窟の壁画の壁土中のスサ30点、ほぞ木の断片1点、およびフォラディ石窟のスサ6点、カクラク石窟のスサ2点である。さらに第2回目の試料としてバーミヤーン主崖窟の壁画のスサ3点と近くのダウティ石窟のスサ2点が追加された。これらの試料が、当名古屋大学年代測定総合センターの中村俊夫教授のもとで、世界で初めてタンデントロン加速器質量分析計によるC14年代測定法によって測定されたのである。

I. 従来の研究と年代観

バーミヤーンは大規模な遺跡であるにもかかわらず、いつ、どのような事情によって造営されたのか、その年代は不明瞭で、様々な説が提起されてきた。というのも、造営について記した歴史文献や銘文といった史料は何も残されていないからである。僅かに、この地を訪れた中国唐代の三蔵法師玄奘と新羅の入竺僧慧超の記録が、当時の仏教の繁栄を伝えている。

AD.629年（もしくは630年）にバーミヤーン（梵衍那国）を訪れた玄奘は、仏教の盛んな様子を記している。すなわち、「伽藍は数十ヶ所あり、僧徒は数千人いて、小乗の説出世部をたっとび学んでいる」こと、また西大仏と東大仏のあり様についても記し、さらにこの国の先王が建てた伽藍や長さ千余尺の涅槃像が伽藍の中にあることなども伝えている（『大唐西域記』大正蔵51巻、p.873b）。

玄奘の訪問からおおよそ100年後のAD.727年に、新羅の入竺僧慧超もバーミヤーン（犯引国）を訪れ、記録を残している。すなわち、仏教の現状について「王も豪族も庶民もおおいに三宝を敬っている。寺も多く僧も多く、大乘と小乗の教えを行っている」とある（『慧超往五天竺国伝』大正蔵51巻、p.978a）。慧超の記録には大仏や寺院についての言及はない。

玄奘と慧超の記録は、当時のバーミヤーンの仏教事情ばかりでなく、気候、風俗、作物、政治状況なども記しており、貴重な歴史史料といえる。それらによって、当時バーミヤーンで仏教が大層盛んで、王から庶民まで厚く信仰されていたことが分かる。しかし、大仏や石窟などがいつ造られたかについては何も述べられていない。

バーミヤーン遺跡の年代論は、考古学・美術史学による現地調査によって開始された。その研究史を簡単に振り返ってみよう。最初の本格的なバーミヤーン調査は、1922年のA.フーシェの踏査と、それをもとに行われたJ.アッカンを隊長とするフランス考古学派遣団によって行われ、2冊の報告書と1篇の補遺が刊行された⁽¹⁾（1928年、1933年、1959年）。フランス隊は東大仏周辺窟から番号づけを行い、A～Dの名称をつけた。さらに壁画や彫塑装飾をもつ窟や石窟構造上興味深い窟にE～K

までの記号を付した。西大仏周辺の重要な窟にはⅠ～Ⅻまでの番号をつけている。窟の記号づけは一つの窟に対して付す場合もあるが、いくつかの窟がまとまってグループをなす場合はそれらを総称して付し、それらに祠堂・講堂・僧房といった機能を推測している。

アッカンは『大唐西域記』に記された、「先王が建てた伽藍」をカニシカ王と結びつけ、東大仏近くにそれが建てられたと考え、バーミヤーン遺跡の始まりを2世紀頃とした。東大仏はガンダーラ仏の影響が見られることから2～3世紀頃、西大仏はグプタ仏の衣文表現に影響を与えたとみて3～4世紀頃と推定した。また、石窟の年代に関しては、それらに残る壁画や彫塑装飾をもとに、主にササン朝ペルシアの影響の度合を目安にして、3～7世紀に位置づけた。

アメリカのハーヴァード大学教授 B.ローランドは1936年にバーミヤーンの現地調査を行い、それに基づいて主に壁画に関する研究を発表した⁽²⁾。ローランドはバーミヤーン壁画にはササン系、中央アジア系、インド系の三つの様式の流れがあることを具体的に指摘するが、年代に関しては菩薩の冠飾の形態をホスローⅡ世やエフタル王の貨幣に表されたそれとの比較などから、いずれも6世紀末～7世紀初め頃と推定した。

日本で最初に本格的なバーミヤーン研究をなしたのは、1939年にアッカン一行と共にバーミヤーンを訪れた東京大学教授吉川逸治（故人、元名古屋大学教授）であった。吉川はフランス隊の調査研究に基づきつつも、独自の考察を行い、主に壁画の様式・主題からバーミヤーンの年代を5～7世紀と推定した⁽³⁾。

名古屋大学は吉川逸治の示唆を受けて、1964年と1969年の2回にわたって、バーミヤーンの現地調査を行った。1964年には中日新聞社の後援で、中部財界や薬師寺からの援助も得て、美術史の柏瀬清一郎（故人）を代表にして、前田耕作（現和光大学名誉教授）、藤井知昭（現中部高等学術研究所教授）、安田英胤（現薬師寺住職）など多彩なメンバーで、バーミヤーン石窟のみならず、民族音楽や玄奘ルート の踏査も兼ねた調査を行った。当時は海外調査も珍しい時代で大きな反響を呼んだ。

1969年には建築史の小寺武久（現名古屋大学名誉教授）を代表として、美術史および建築史の立場からバーミヤーンの石窟調査を行い、小寺武久・前田耕作・宮治昭による報告書『バーミヤーン—1969年度の調査—』が名古屋大学から刊行された⁽⁴⁾（1971年）。フランス隊の報告書では石窟の実測図はごく限られたものであったが、小寺を中心にして多くの石窟の実測図が作製され、現在に至るもバーミヤーン主崖窟の石窟の図面はこの名古屋大学隊の報告書がもっとも詳しい。名古屋大学隊は美しい壁画のある Na 窟の発見をはじめ（図 11、12）、新たに多くの石窟を調査した。石窟の名称はフランス隊のものを継承するとともに、新しく L～Z、XIII～XVI、東Ⅰ～東Ⅶなどの記号を付した。小寺武久は石窟空間の独自の発展形態という観点から、建築史の興味深い論考を発表した。この調査に参加した筆者は東大仏や西大仏の天井壁画をはじめ、多くの壁画の描き起こし図を現地で作成し、報告書に掲載した。これらの描き起こし図はその後海外でも広く用いられ、バーミヤーンの基礎資料となっている。名古屋大学隊は詳しい年代論については述べていない。

1970年代には、当時アフガニスタン考古局長であった Z.タルジ（現ストラスブール大学教授）によるバーミヤーン調査が行われ、その成果をもとにした著書が、本文篇と図版篇の2冊本として1977

年にパリで刊行された⁶⁾。アッカンのフランス隊の報告書が概括的であったので、重要な石窟をできるだけ多く取り上げ、石窟の測図、写真図版、モチーフの図面などを図版篇に収録した。本文篇では叙述に多くのページを割き、その上で彫塑や壁画のモチーフの比較考察を行い、最後に編年的な結論を述べている。

タルジはバーミヤーンの仏教遺跡全体の年代を 6～9 世紀と遅い年代におく。西大仏はその仏龕壁画に表された「飾られた仏陀」の冠飾がエフタル系のナラナ・ナレンドラ王のそれに近いこと、および玄奘訪問以前と考えられることから AD.580～630 年の造立とみる。東大仏は 6 世紀に遡るとみるが、その仏龕壁画は突厥期のかなり遅い時期を示唆する。タルジは、アッカンの考えとは反対に、西大仏周辺の諸窟（I～XII 窟）が西大仏に続くもので古く、中央区の E、J、また東大仏周辺の A、B、F、G などの諸窟は 8～9 世紀まで下ると推定した。

京都大学調査隊は樋口隆康（現京都大学名誉教授）を代表として、1974、76、78 年にバーミヤーンの調査を精力的に行った。バーミヤーン石窟の網羅的な写真撮影、摩崖全体と二大仏の写真測量、石窟の総番号づけ、カクラクとフォラディの石窟の実測などが実施された。この調査の成果は 4 巻本の大部な報告書『バーミヤーン—京都大学中央アジア学術調査報告—』として、1983～84 年に刊行された⁶⁾。第 I 巻は図版篇（壁画）で、バーミヤーン主崖窟、フォラディ石窟、カクラク石窟を含む、ほぼすべての壁画について全体および細部をカラー図版で網羅的に収めている。第 II 巻は図版篇（石窟構造）で、バーミヤーン主崖、フォラディ、カクラクの石窟の内部構造を中心に、大仏彫像や彫塑装飾を含むモノクロームの写真図版である。これら I、II 巻の図版篇および第 III 巻の本文篇、第 IV 巻の英文レジュメ・図面篇によって、バーミヤーン石窟のほぼ全貌が捉えられる。大仏や壁画の多くが破壊されてしまった今日、この京都大学隊の報告書はもっとも資料的価値の高いものといえる。

樋口隆康は、第 III 巻の本文篇の中で「石窟構造及び年代観」を論じている。樋口は『北史』西域伝に出る范陽国がバーミヤーンで、4 世紀には中国に知られていたとし、それ以降、9 世紀にイスラームが侵入するまで仏教が栄えたと考察する。二大仏のうち摩崖の状態と仏龕の歪んだ形態から見て、東大仏の方が早いとみる（年代については触れない）。また、連珠円文や塑造唐草文の比較から 7 世紀にとくに隆盛し、8 世紀まで続いたと推定した。

京都大学調査隊のメンバーとして加わった筆者は、第 III 巻の本文篇の中で「壁画および塑造の装飾美術に関する比較考察」を行った。すなわち、バーミヤーン石窟の壁画および塑造による装飾モチーフとして、花綱文様・花文様・虎皮文様・豹皮文様・建築装飾・人面・鬼面・唐草文様・光背文様などを取り上げ、インド、ガンダーラ、中央アジアの諸作例と詳しく比較検討し、バーミヤーンの装飾美術は 6～8 世紀に年代づけられると結論づけた⁷⁾。

京都大学隊の主要なメンバーであった桑山正進（現京都大学名誉教授）は、巡歴僧の記録を中心とした中国文献を詳しく検討し、インドと中国を結ぶ交易の大道が 6 世紀中頃を境に、カラコルム山脈西側を越えるルートから、バーミヤーンを通るヒンドークシュ山脈越えのルートに大きく変化する様相を跡づけた⁸⁾。二体の大仏と多くの石窟が造られたのは、バーミヤーンがインドと中央アジア・中国を結ぶ交通路の要衝として繁栄したからに相違ないとみて、6 世紀中葉以前にはバーミヤーンは

歴史上に姿を見せないことから、それ以降であることを考証したもので、その歴史的背景に突厥の支配権を想定した。

1970年代のバーミヤーン調査に基づく研究として、クランバーグ・サルター（現ウィーン大学教授）の著作がある⁽⁹⁾（1989年刊）。彼女の考察の主眼はバーミヤーン美術を歴史の中に探ろうというもので年代論に重きがおかれる。クランバーグは、6世紀中頃にエフタルはササン朝と突厥によって滅ぼされるが、彼らはアフガニスタン東部で突厥の名目的な支配を受けながらも、8世紀まで地方の国家の領主となって存続したとみて、バーミヤーンの造営と関係づける。すなわち、彼女はバーミヤーンの大仏をはじめ石窟や壁画を6世紀末～8世紀、あるいはそれ以降に位置づけようとする。玄奘の訪問時には二大仏や伽藍は完成して間もない様子であり、慧超訪問時に繁栄を極めていたことも理由に挙げる。二大仏のうち、東大仏は作も整わず先行するが、西大仏も続いて造られ、摩崖の岩質は柔らかいので比較的短期間に完成しただろうと推測し、両大仏ともAD.600年を遡らず、西突厥の統葉護可汗がバーミヤーンに支配を及ぼしていたAD.618年～630年頃を想定する。壁画に関しては、東大仏壁画を7世紀中葉～後半、西大仏壁画を7世紀後半、K、H、I窟、カクラクなどの壁画を7世紀末～8世紀初め、E窟やフォラディ壁画を8世紀、もしくはそれ以降とする。

最後に、近年田辺勝美（中央大学教授）によって提起された、東大仏とその仏龕天井壁画についての年代観について述べておこう⁽¹⁰⁾。氏は大仏自身と仏龕壁画の制作は一連のもので、同時期の制作と考える。その仏龕天井に描かれた太陽神（同氏は大仏の寄進者である国王の肖像と解釈するが）のつける頸飾りに田辺は注目し、円形に三つの玉飾りがつく、その形態の頸飾りはササン朝ペルシアのアルダシール3世（628-630年）の貨幣に見られるものに起源するもので、バーミヤーン東大仏とその壁画も、それ以降、おそらく635年～645年、ないしそれ以後に完成したものに相違ないと結論づけた。『大唐西域記』の東大仏に関する記述、つまり「高百余尺、分身別鑄、総合成立」は、大仏造立が着手されていたが未完の状態であったために、誤った情報が入ったのだろうと田辺は推測している。

以上、バーミヤーンの研究史を年代論を中心にして簡単に辿ってみた。文献史料も二次的なものがほとんどであり、壁画や彫塑の比較研究も決定的なものとはなり難いなど、多くの困難を有するだけに諸説紛々といった感がある。バーミヤーンの年代に関し、かつては2、3世紀～7世紀といった年代観が提起されたが、近年は6～8世紀とする見解が主流となっており、しかも7世紀以降まで下げる説も少なくない。そうした状況の中で、最も古い石窟はいつ迄遡るか、また大仏とその仏龕壁画をいつの時代におくかについて、研究者の間で大きな見解の相違がある。

このような研究状況にあって、今回のタンデトロン加速器質量分析計によるC14年代測定法を用いた、自然科学の手法による年代測定は、今迄にない試みで、極めて注目されよう。

II. 今回のC14年代測定によるバーミヤーン美術の年代とその意義

今回の名古屋大学のC14年代測定によって、バーミヤーン石窟群の広範囲にわたる編年に見通しがつけられるようになった。今回の測定によって大略、AD.450年～850年という年代が提出されたことは、バーミヤーン美術史研究の近年の研究動向ともほぼ相応するもので、極めて妥当なものとい

える。とはいえ、各窟の個々の壁画の年代に関しては、今回の測定結果と美術史研究とを合わせ、今後さらに詳しく検討する必要がある。

バーミヤーンの代表的存在である東大仏と西大仏に関しては、破壊された大仏彫像の残骸をドイツのチームが整理保全の作業を行っており、その過程で大仏彫像に含まれていたわらや木杭の断片が採取され、ドイツは独自にそれらを C14 年代測定法によって測定した。その報告は未だ簡単な発表に留まっているが、それによれば東大仏は $AD.507 \pm 12$ 年、西大仏は 551 ± 15 年という⁽¹¹⁾。今後、さらに詳しいデータが公表されれば、われわれの石窟壁画の測定結果と合わせ考えることによって興味深い展望が開けるであろう。

今回の測定には、東大仏と西大仏のそれぞれの仏龕天井に描かれていた壁画は含まれておらず、また三体の坐仏の仏龕壁画 (E 窟、H 窟、I 窟) もほとんど含まれていない (僅かに I 窟の側壁のスサ 1 点が含まれる) のは残念で、今後それらのスサやほぞ木の試料が採取され、測定できれば、さらにバーミヤーン美術の全体的な編年に大きな光が当てられることになるだろう。

まず、今回の年代測定に関し、全体的なコメントを述べておこう。全部で 44 点の試料のうち、同一室から試料を 2 ヶ所以上採取して測定した例として、A 下窟 (2 ヶ所)、Fa 窟 (2 ヶ所)、Fc 窟 (2 ヶ所)、Ee 窟 (4 ヶ所)、Jb 窟 (2 ヶ所)、Jg 窟 (2 ヶ所)、K3 窟 (2 ヶ所)、Z1 窟 (2 ヶ所)、フオラディ第 4 窟 (3 ヶ所) がある。それらの測定結果を見ると、Fc 窟と Z1 窟を除いて、いずれも極めて近い数値が出ており、基本的に壁画が一度に描かれたこと、測定の精度がかなり高いことが推測される。ただ、Fc 窟は 2 ヶ所の測定値で、それらは重なる部分もあるが、隔たる部分もあり、誤差の年代幅も大きく、さらに今後の精査が必要であろう。また、Z1 窟の 2 点の測定値のうちの 1 点は、極めて新しいもので、明らかに後世の住民によるものに相違ない。それ以外は極めて安定した数値を示しており、信頼度の高いものといえる。

ところで、バーミヤーンの石窟はしばしば複数の窟が集まってグループをなしている点に特徴があり、フランス隊や名古屋大学隊はそれを考慮して、A 上窟群、A 下窟群、B 窟群、C 窟群等の命名をし、例えば Ca 窟、Cb 窟、Cc 窟等と各窟に名称を付した。今回、こうした一連の石窟群からスサの試料を採取し、測定した例がいくつかある。Ba・Bd 窟、Ca 前室・Ca・Cb 窟、D 前室・D 窟、Fa・Fc 窟、Jb・Jd・Je・Jg 窟である。それらの測定結果を見ると、ほとんど同一の数値が出ている窟として C 窟群、D 窟群、J 窟群があり、これらの石窟群がそれぞれほぼ同じ時期に一連のものとして開窟されたことが推測される。また B 窟群、F 窟群は数値にやや開きがあり、同時期ではないにしても継続的に造営された可能性がある。もちろん今回の測定は、石窟群のすべての窟の試料が測定されている訳ではなく、限られた試料の測定結果に基づいての推定であるが、試料の年代測定によって一連の石窟群の造営過程についても示唆するところが大きいことがわかる。

今回の C14 年代測定の結果と、美術史的研究による年代観とを照合せながら、少しく立ち入って検討することにしよう。すでに述べたように、今回の C14 年代測定の試料には東西の二大仏の仏龕に描かれた壁画のスサは含まれていない。二大仏の壁画を除いて、バーミヤーン主崖窟では A 下、Ba、Bd、Ca、Ca 前室、Cb、D、D 前室、D1、Ee、Fa、Fc、I、Jb、Jd、Je、Jg、K3、M、Na、Sa、Z1

などの石窟の測定結果が提出され、またフォラディ石窟では第 2、4、5、6 窟、カクラク石窟では第 42、43 窟の測定がなされた。それらの測定結果に基づいて時代順に並べると、ほぼ AD.450～850 年にまたがり、それらを大きく 3 期（Ⅰ～Ⅲ）に分け、さらにそれぞれ 2～3 期に細分することができる。それを示せば以下ようになる。

- I (1) 5 世紀中頃～6 世紀中頃 …… M、Jb、Jd、Je、Jg
- (2) 6 世紀中頃～6 世紀末頃 …… Ca、Ca 前室、Cb
- (3) 6 世紀中頃～7 世紀前半 …… D1、A 下
- II (1) 7 世紀前半～7 世紀後半 …… D 前室、D、Na、Sa
- (2) 7 世紀中頃～7 世紀後半 …… Fa、Ba、東Ⅲ
- III (1) 7 世紀後半～8 世紀後半 …… Bd、Ee、K3、I
- (2) 8 世紀後半～9 世紀後半 …… Fc(?), Z1

今回の C14 年代測定によって、まず注目されるのは、最も古い年代が第Ⅰ期(1)の 5 世紀中頃～6 世紀中頃に遡ること、しかも従来ほとんど注目されなかった J 窟群と M 窟がそれに該当する点である。

J 窟群は全部で 7 つの窟から成る一連のもの（Ja～g）で、そのうち壁画などが残る重要な 4 つの窟から 5 つのスサ試料（試料 28～32）と 1 つの木片試料（試料 39）が採取され、測定されたが、いずれも極めて近い数値が得られ、しかも 5 世紀中頃～6 世紀中頃の古い年代が出された。J 窟群の特徴は、ストゥーパが設置されたり、側壁に塑造の仏像を取りついたり、壁画で装飾されたりする、多様な祠堂窟から成っていることである。すなわち、Jb 窟は方形プランに浅いドーム天井を頂く窟で、窟中央にストゥーパが設置されていたとみられ、その基壇の跡が残っており、さらに塑造の仏像が側壁に取り付けられていた（そのほぞ木の一つの木片が今回測定された）。この窟からフランス隊はグプタ後期の書体を示す写本の断片を発見している。Jg 窟も方形プランにドーム天井窟であるが、四隅にスキンチアーチを設け、窟全体を壁画で装飾するとともに、側壁には仏像を取り付けていた。一方、Jd 窟は同じくドーム天井窟であるが、四隅にスキンチアーチを設けることなくそのまま掘り残し、窟全体を壁画のみで装飾していた。Jg 窟と Jd 窟にはともに小涅槃図が表されたことも注意されよう。従来、J 窟群は石窟構造の上でも、壁画様式の上でも、バーミヤーン美術全体の中で後期のものとする見解が一般的であったが、今回の測定結果は数値が一定しているだけに、年代観に再検討を迫るものといえる。

M 窟はいびつな方形プランに平天井の簡素な窟であるが、全面に壁画が描かれていた。この窟も石窟構造において見るべきものはなく、壁画の主題においても大きな坐仏を中心に小仏や僧、供養者を描く一般的なものであるが（天井は千仏構成）、南壁の隅に見られる供養者（図 6）の服装にはトハリスタンとの繋がりが窺え、また北壁の小龕近くに馬に曳かれる日天と鷲鳥に曳かれる月天の図像が見られる点が注目される。日天と月天の図像はインドのグプタ系のもので、トハリスタンの服装とともに、それらが 5 世紀中頃～6 世紀中頃にバーミヤーンに入っていたとすれば、バーミヤーン美術全体の中での東西交流のあり様を見直す必要に迫られよう。

東大仏の造立は、ドイツの年代測定によれば 6 世紀初め頃で、われわれの第Ⅰ期(1)に相当し、おそ

らくバーミヤーンの最初の造営期に当たるものと考えられる。第Ⅰ期(1)のJ窟群もM窟も東大仏から離れた位置にあり、東大仏造立と同じ頃にこれらいくつかの石窟も造り始められたとみなされよう(図4)。興味深いのは、東大仏の周辺窟であるC、D、D1、A下の諸窟は、今回の測定によって第Ⅰ期(2)(3)の6世紀中頃以降に年代づけられたことで、このことは年代測定の結果が納得できるものであることを物語っている。というのも、東大仏には東西ともに大仏の頭上にまで達する階段がつけられており、その階段の途中から枝分かれする形で周辺諸窟が造営されているからである。つまり、東大仏がまず造立され、その後に周辺諸窟が造られたのに相違なく、その逆の造営過程は考え難いのである。6世紀初め頃に東大仏が造立され、その後、6世紀中頃以降にC、D、D1、A下といった周辺諸窟が造られていったというのは大層説得力がある(図5)。

第Ⅰ期(2)の6世紀中頃～末頃に位置づけられたのは、東大仏の西側上方にあるC窟群である。C窟群はCa、Cbが主要な祠堂窟で、いずれも円形プランにドームを頂く窟で、ともに周囲の壁面に多くの仏陀像を塑造や壁画で表していた(図7、8)。Ca窟には前室がつき、そこには赤褐色の線描による仏像やストゥーパ図が描かれている。これら一群のC窟群が6世紀後半のほぼ同じ年代の測定値が得られたことは興味深い。

今回の年代測定によれば、東大仏周辺のA下、B、B1、C、D、D1の諸窟の中で、このC窟群に続いて、第Ⅰ期(3)の6世紀中頃～7世紀前半の年代が与えられたのは、D1窟とA下窟である。D1窟はD窟を挟んで、C窟群の真下にある。このD1窟はいびつな円形のプランにドーム天井の窟で、周壁に多くの仏龕を掘り込んでいる。下方の仏龕の外に壁画が残り、C窟群と同様に塑造の仏像と壁画装飾を並存させていた。

D1窟とほぼ同じ年代とされたのは、東大仏の東側にあるA下窟である。A下窟は方形プランにドーム天井の窟で、四隅にしっかりしたスキンチアーチを設け、鼓胴部も明確で、構築性に富む石窟構造を示す。側壁には塑造の仏像が取り付けられていたとみられ(ほぞ穴がある)、鼓腹部には仏像群の壁画が描かれていた。

以上、第Ⅰ期の様相を見てきたが、東大仏とその周辺窟を中心にバーミヤーンの初期の造営が行われたとみられるが、ドイツの年代測定によれば、東大仏に少し遅れて、同じ第Ⅰ期の6世紀中頃に西大仏も造立された。西大仏の仏龕天井壁画や西大仏足下のⅠ～Ⅻ窟などの年代測定は行われておらず、それらと西大仏自体との年代的關係は今後の課題である。しかし、いずれにしても、第Ⅰ期の6世紀に東西の二大仏の造立が行われ、その周辺窟の造営が開始された可能性が高い。

次に、ほぼ7世紀に相当する第Ⅱ期についてみよう。第Ⅱ期(1)の7世紀前半～後半に位置づけられたのは、D前室、D、Na、Saの諸窟である。

東大仏の西側、C窟群とD1窟の間にあるD窟は八角形プランで、天井を円形にしてクロス・ヴォールトを掘り出した装飾性豊かな石窟である。入口を除く七辺に大きな仏龕を設け(当初それぞれに塑造の仏像を祀っていたに相違ない)、その上の周壁にも上下二層にわたって列龕帯をめぐらし、塑造の唐草文様などを施し、列龕下には仏像を取り付けていた。このD窟には大きな前室が付き、天井や側壁に壁画が描かれた。天井にはいわゆるササン朝ペルシア系の連珠円文が見られる点で、とくに興

味深い。年代測定の結果によれば、D窟とその前室は7世紀中頃の一連の開窟で、C窟群とD1窟に続いて造営されたと考えられる。

Na窟は東大仏からは離れ、二大仏のほぼ中間に位置する。方形プランにラテルネンデッケ天井の窟で、名古屋大学隊によって美しい壁画が発見された(図11~14)。その壁画は鮮やかな朱、青、緑を用い、線描も達者なものである。Na窟の年代測定の結果では、7世紀中頃~7世紀第3四半期の年代が与えられた。

Sa窟は東大仏の西側近くにある小窟で、ラテルネンデッケ天井をとるが、過半は崩壊している。天井や側壁上部に断片的に残る壁画は、Na窟に近い絵画様式を示す美しいものである。年代測定の結果も7世紀第2四半期~第3四半期で、Na窟とほぼ同時期である。

続く第Ⅱ期(2)の7世紀中頃~後半に年代づけられた石窟には、東大仏近くのBa窟、さらに東方のFa窟と東Ⅲ窟が挙げられる。Ba窟は方形プランにドーム天井、四隅にスキンチアーチを掘り出した構築性に富んだ石窟で、当初壁画で装飾されていた。一方、Fa窟は八角形プランにドーム天井をとる窟で、鼓胴部には三葉形の列龕を設け、塑造の唐草文様を施し、仏像を取り付けていた(図9、10)。塑造装飾を中心とするが、壁画装飾も用いている。これに対し、方形プランにドーム天井をとる東Ⅲ窟は、側壁に塑造の仏像を取り付け、壁画で装飾した石窟であり、石窟構造も素朴で、壁画様式の上でもむしろJ窟群やC窟群に近い。この石窟の位置づけは多くの問題を残している。

以上見てきたように、第Ⅱ期の7世紀に年代づけられた石窟には石窟構造や壁画様式などにおいて、バーミヤーン美術の多彩な展開が見られ、第Ⅰ期に続くバーミヤーン美術の隆盛期といえよう。

最後に、今回の年代測定で後期の石窟といえる第Ⅲ期について述べよう。まず第Ⅲ期(1)の7世紀後半~8世紀後半の年代が与えられた、Bd、Ee、K3、Iの諸窟を見よう。Bd窟は長方形プランに複雑な折上げ天井を示す石窟で、朱や青を用いた鮮やかな壁画も一部残存する。Ba窟とは年代的にやや隔たりのあるようである。Ee窟はかなり大きな方形プランにドーム天井をとる石窟で、四隅にスキンチアーチを掘り出している。天井には弥勒菩薩と千仏図、涅槃図が描かれているが、黒く煤けている。

K3窟は二大仏の中間、高い位置にある石窟でアプローチが難しいが、美しい弥勒菩薩像と千仏の円輪構図、および涅槃図があるので名高い。この窟は7世紀第3四半期~8世紀第3四半期の年代が与えられた。この窟の壁画はカクラク第43窟のそれと、図像構成や絵画様式に近いが、カクラク第43窟の年代測定の結果もほぼ同一の年代が得られている。

I窟は坐仏窟の一つで、その仏龕天井には舞楽図が描かれていることで名高い。試料は三葉形仏龕の西突出部下面から採取された。その測定値は7世紀末~8世紀第3四半期である。従来、この壁画は天井の舞楽図(図15)がキジルや敦煌北魏窟などの比較から、年代を遡らせる傾向が強かったが、側壁に描かれた千仏の円輪構図(図16)はK3窟のそれに類似しており、バーミヤーン美術の後期に位置づけられるようである。今後、さらに天井部や廻廊部(廻廊にも壁画が残る)の試料の採取と測定が望まれる。

終末期の第Ⅲ期(2)に位置づけられたのは、Fc窟とZ1窟であるが、Fc窟に関してはさらに検討を要すると思われる。すなわち、2試料の測定年代は1つは7世紀末~9世紀中頃と年代幅が大きく、

もう1つは8世紀第4四半期～9世紀第3四半期であり、かなり測定値が不安定である。年代幅も大きい。このFc窟は7世紀に年代づけられたFa窟に隣接する小窟で、方形プランにラテルネンデッケ天井をとる。天井には千仏図、入口上部に涅槃図のある興味深い石窟であり、再調査が望まれる。

Z1窟は8世紀第4四半期～9世紀第3四半期の年代が与えられた。この窟は八角形プランにドーム天井の石窟で、ドーム部には全面煤けているが、カクラク第43窟と同様の千仏円輪構図が表されている。この窟の側壁には後世の土壁が塗られており、そこからの試料は近現代の測定年代が示された。

以上、バーミヤーン主崖窟について述べた。主崖窟から南西に位置するフォラディ石窟、および南東に位置するカクラク石窟についても触れておこう。

フォラディ石窟からは、第2、4、5、6窟のいずれも壁画のある窟からの試料が測定された。しかも第4窟と第6窟は7世紀末～8世紀第3四半期でほぼ一致し、第2窟は7世紀後半、第5窟は8世紀第2四半期～9世紀中頃と幅があるが、全体的に見ると、フォラディの壁画窟は7世紀後半～8世紀頃に収まり、バーミヤーン主崖窟の後半期に対応するといえよう。

一方、カクラク石窟のうち壁画のあったのは第43窟で、フランス隊によって全面的に運び出された（カーブル博物館とギメ美術館に分蔵）。この窟の南西壁に残っていた壁画断片のササが採取され、測定された。それによれば、7世紀第4四半期～8世紀第3四半期で、かなり幅があるものの、フォラディ石窟とも相近い、バーミヤーン美術の後半期に属するものといえよう。なお、カクラク第42窟は9世紀末～10世紀の年代が得られており、仏教の造形活動が終息した後も石窟が開かれ、用いられた形跡が窺われる。

以上、今回のC14測定によって得られた結果に基づいて、バーミヤーン石窟の造営と塑造や壁画の制作の様相について、若干のコメントを行った。今後、さらに二大仏の仏龕壁画をはじめ、多くの試料が採取され、測定されることで、不明瞭なバーミヤーン遺跡の年代に関し、貴重な示唆が与えられるであろう。ただ、注意すべきは、C14年代測定の結果はあくまでも可能性の論理であって、それを絶対視して機械的にその結果を用いればよいということにはならないということである。年代測定の試料を増やして精度を高めるとともに、美術史学・考古学・歴史学など、様々な関連分野の研究を連携させながら、C14年代測定の結果と相互に交差させて、歴史的事実近づける作業を行うことが、今後の重要な課題となるであろう。

注

- (1) A & Y. Godard et J. Hackin, *Les Antiquités Bouddhiques de Bāmiyān*, MDAFA, tome II, Paris et Bruxelles, 1928. J. Hackin et J. Carl, *Nouvelles Recherches Archéologique à Bāmiyān 1930*, MDAFA, tome III, Paris, 1933. J. Hackin, "Recherches Archéologiques à Bāmiyān en 1933", *Diverses Recherches Archéologique en Afghanistan 1933-1940*, MDAFA, tome VIII, Paris 1959, pp.1-6. なお, J. Hackin, *L'Œuvre de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan (1922-33)*, Tokyo, Maison Franco-Japonaise, 1933, pp.19-57 も参照。

- (2) B. Rowland and A. K. Coomaraswamy, *The Wall-paintings of India, Central Asia and Ceylon*, Boston, 1938; B. Rowland, "The Dating of the Sassanian Painting at Bāmiyān and Duktar-i-Nushirvan", *Bulletin of the Iranian Institute*, VI-VIII, 1946, pp.35-42; do., "Studies in Buddhist Art of Bāmiyān: The Bodhisattva of Group E", *Art and Thought*, London, 1947, pp.46-50; do., *The Art of Central Asia*, New York, 1974, pp.82-115. なお, R. J. Gettens, "The Materials in the Wall Paintings of Bāmiyān, Afghanistan", *Technical Studies*, VI, 1938, pp.186-193 を参照.
- (3) 吉川逸治「バーミヤーンの壁画(上)(下)」『国華』607号, pp.177-184; 609号, pp.239-245, 1941. 同「バーミヤーンの芸術」『中国及び西域の美術』東京, 1948, pp.71-109. 同「バーミヤーン」『アフガニスタン古代美術』東京, 1964, pp.167-170.
- (4) 小寺武久・前田耕作・宮治昭『バーミヤーン—1969年度の調査—』名古屋大学, 1971; 小寺武久「バーミヤーンの石窟寺院と石窟の空間形態に関する考察」『建築史研究』38号, 1971, pp.1-26.
- (5) Z. Tarzi, *L'Architecture et le Décor Rupestre des Grottes de Bāmiyān*, 2vols, Paris, 1977. なお, do., "La grotte K3 de Bāmiyān", *Arts Asiatique*, XXVIII, 1983, pp.20-29 も参照.
- (6) 樋口隆康編『バーミヤーン—京都大学中央アジア学術調査報告—』全4巻, 京都, 1983-84.
- (7) 宮治昭の以下の論考も参照。「バーミヤーンの仏龕壁画」『国華』992号, 1976, pp.1-49; 同「バーミヤーン壁画の展開(上)(下)」『仏教美術』113号, 1977, pp.3-27, 118号, 1978, pp.13-47; 同『バーミヤーン、遙かなり』(NHKブックス), 2002; A. Miyaji, "Iconographic Program of the Murals in the Ceiling of Bāmiyān Caves", *Journal of Studies for the Integrated Text Science*, Graduate School of Letters, Nagoya University, vol.1, No.1, 2003, pp.121-152.
- (8) 桑山正進「バーミヤーン大仏成立にかかわるふたつの道」『東方学報』京都第57冊, 1985, pp.109-209. S. Kuwayama, "Two Itineraries Concerning the Emergence of the Colossi in Bamiyan", *Orientalia: Iosephi Tucci Memoriae Dicata*, ed. G. Gnoli and L. Lanciotti, Roma, 1987, pp.703-727.
- (9) D. Klimburg-Salter, *The Kingdom of Bāmiyān: Buddhist Art and Culture of the Hindu Kush*, Naples-Rome, 1989.
- (10) 田辺勝美「バーミヤーン東大仏の製作年代に関する一考察—玄奘さん、見てきたような嘘をいい—」『古代オリエント博物館研究紀要』Vol.XXII, 2001/2, pp.63-104. K. Tanabe, "Foudation for dating anew the 38 meter Buddha Image at Bāmiyān", *Silk Road Art and Archaeology*, 10, 2004, pp.177-223.
- (11) この結果は、2004年12月18日の「バーミヤーン遺跡保存に関する第3回専門家作業グループ国際会議」で口頭発表された。2004年12月19日付朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞など。

Reference of nomination of caves by three missions
石窟番号対照表

French M. フランス隊	Nagoya U. 名古屋大学隊	Kyoto U. 京都大学隊
	M	111
J 6	Jb	385
J 4	Jg	386
J 2	Jd	388
J 1	Je	389
C sanctuaire	Ca	165
C sanctuaire vestibule	Ca vestibule (前室)	165 vestibule (前室)
C reunion	Cb	164
	D 1	168
Lower A	Lower A (A 下)	129
D	D	167
D vestibule	D vestibule (前室)	167 vestibule (前室)
	Na	471
	Sa	176
F	Fa	70
B reunion	Ba	138
	East III (東Ⅲ)	24
B sanctuaire	Bd	140
	Ee	222
K3		330
i	i	530
F	Fc	72
	Z 1	590



図1 バーミヤーン主崖窟全景

General view of the main cliff, Bamiyan



図2 西大仏 The Western Grand Buddha

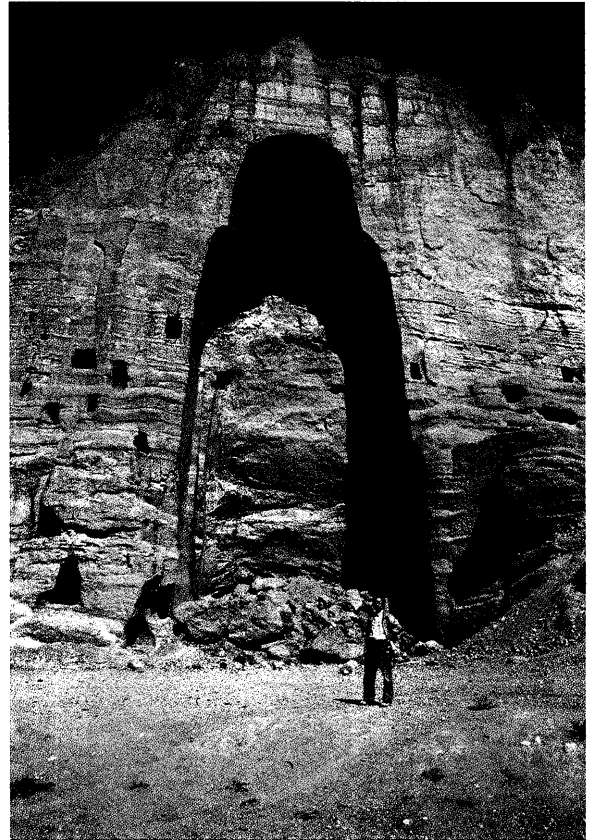


図3 西大仏（破壊後）
The Western Grand Buddha (after the destruction)

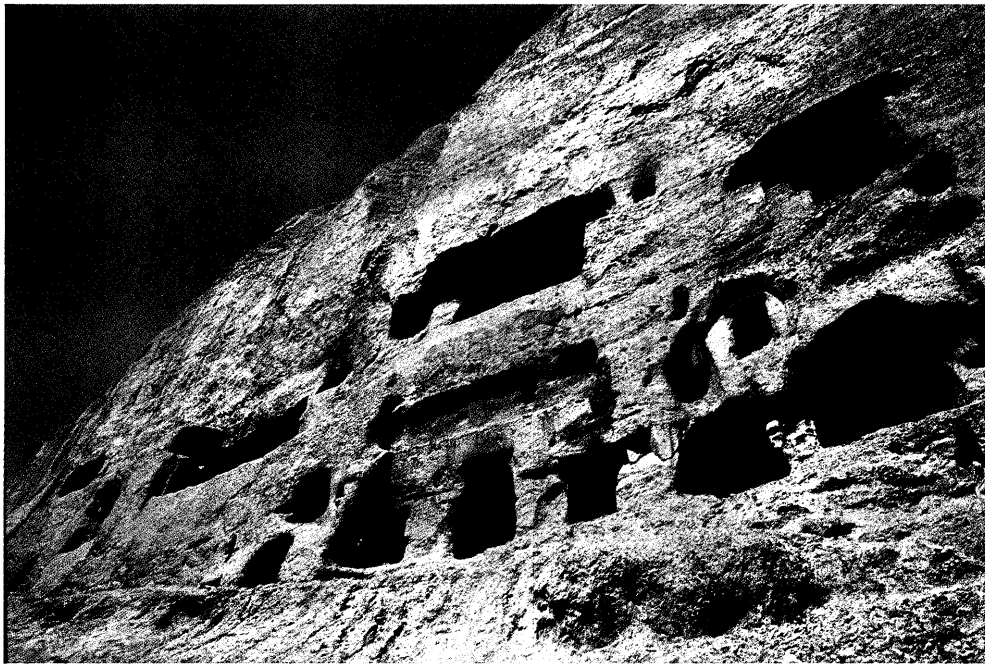


図4 M, A 窟付近の石窟 Caves M and A



図5 C,D,D₁ 窟付近の石窟
Caves C, D, and D₁



図6 供養者像 M 窟
Donors, Cave M

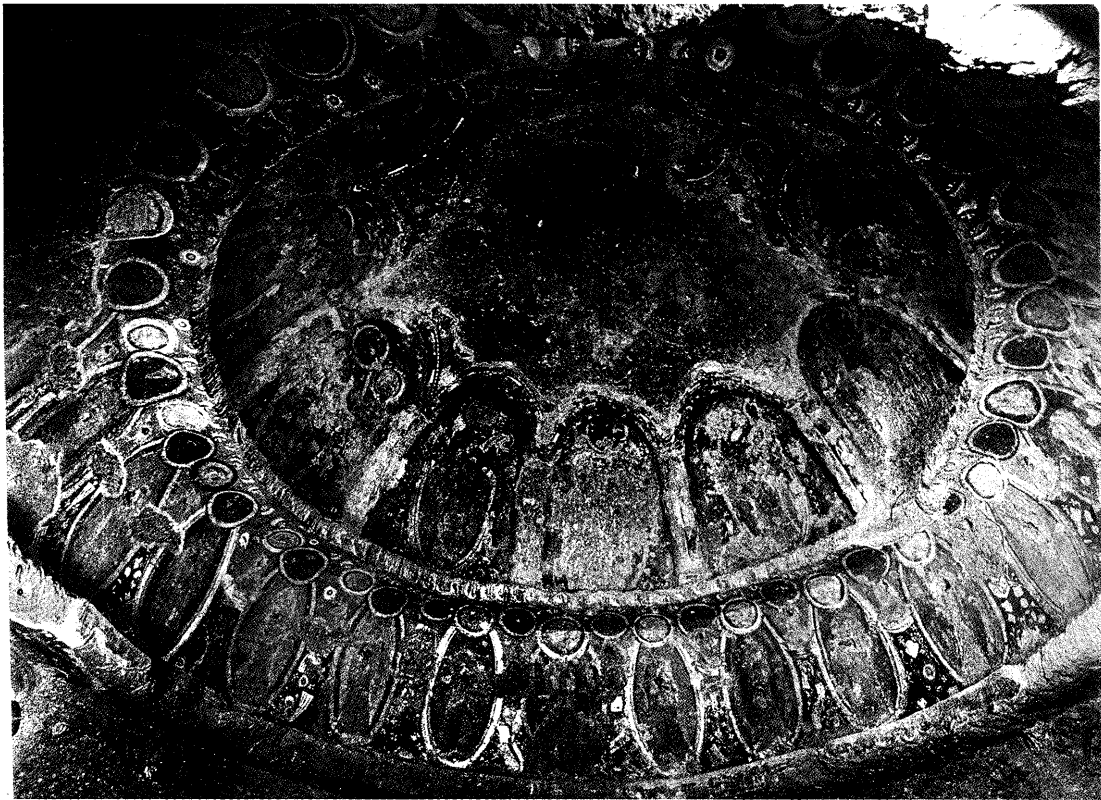


図7 ドーム天井 Cb窟 Dome ceiling, Cave Cb

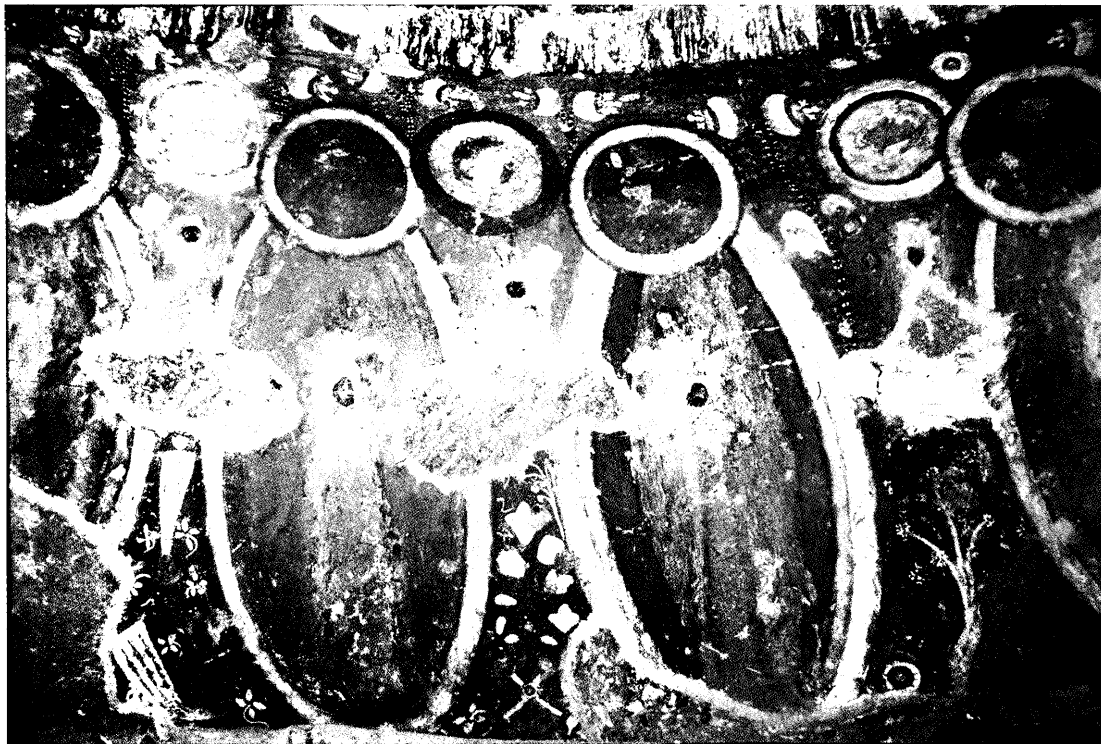


図8 仏像光背列 Cb窟 Row of Buddha's aureoles, Cave Cb



图9 Fa窟内部 Interior of Cave Fa

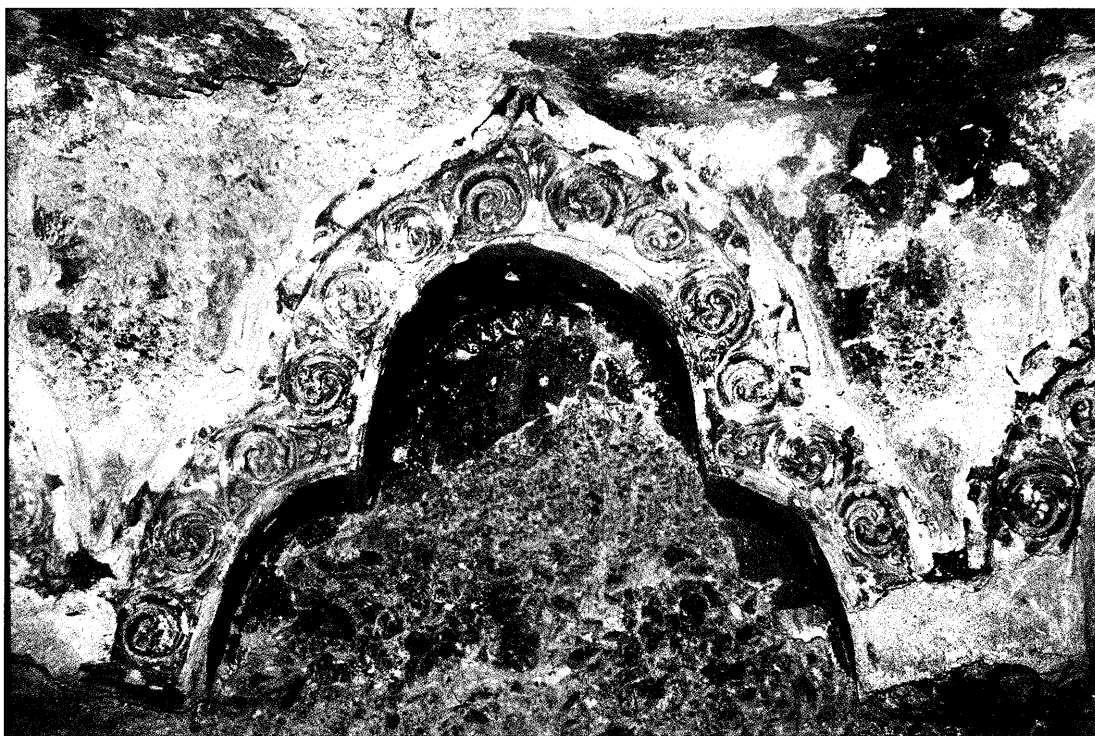


图10 仏龕列 Fa窟 Row of Buddha niches, Cave Fa

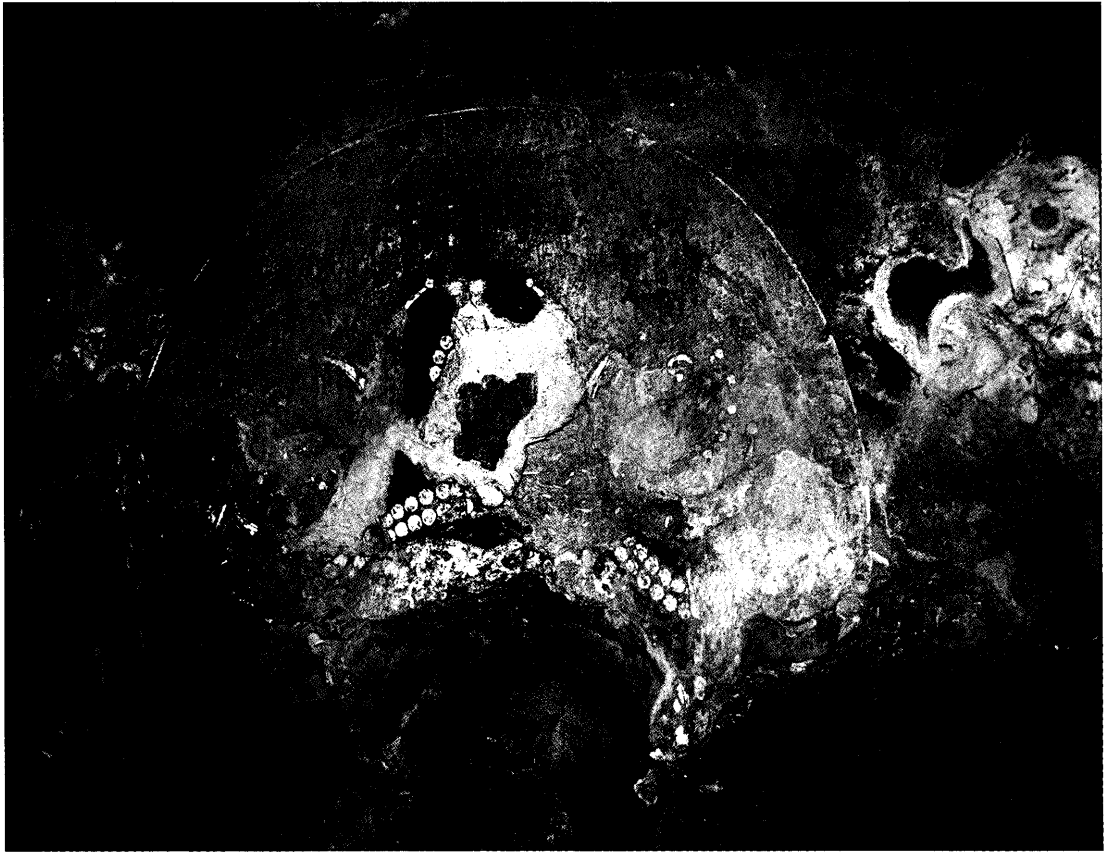


図 1 1 飾られた仏陀 Na 窟 Bejewelled Buddha , Cave Na

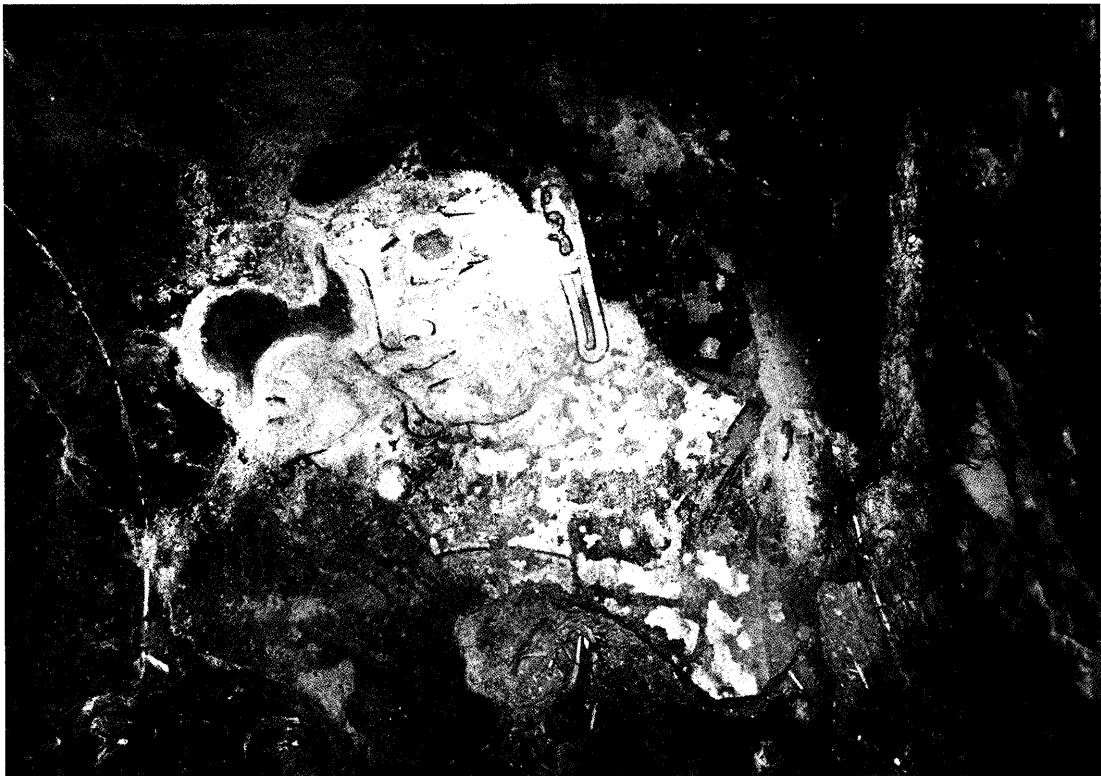


図 1 2 二人の比丘 Na 窟 Two Monks, Cave Na



図 13 Na 窟天井 Ceiling of Cave Na



図 14 飾られた仏陀 Na 窟 (破壊後)
Bejewelled Buddha, Cave Na (after the destruction)



图 15 樂人図 i 窟天井 Musicians, Ceiling of Cave I

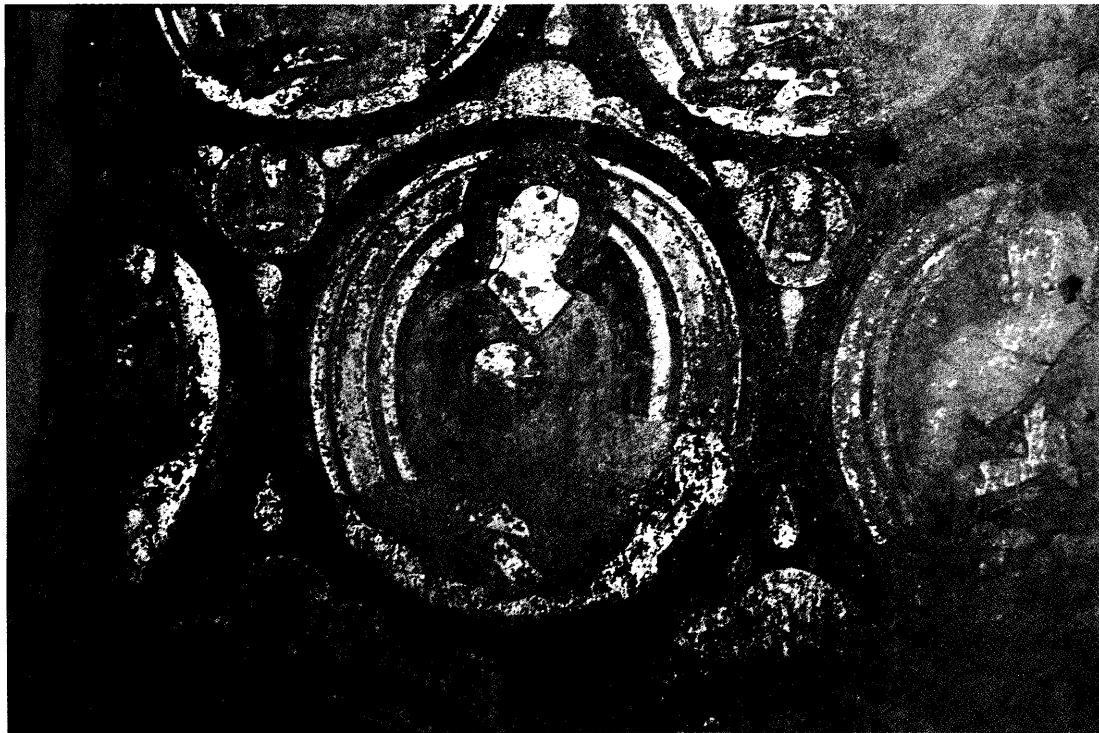


图 16 千仏図 i 窟側壁 Thousand Buddhas, Side wall of Cave I

The Mural Paintings of Bāmiyān and the Radiocarbon Dating Calibration

Akira MIYAJI
Graduate School of Letters, Nagoya University
e-mail: kalpama@lit.nagoya-u.ac.jp

Abstract

Bāmiyān consists of three groups of caves: one is the group of 750 caves in the main cliff facing the south, one and a half kilometer in width, with two colossal images of Buddhas in the east and the west; the second is the Foladi Caves with thirty caves located in the southwest; and the third is the Kakrak Caves with eighty caves situated in the southeast. According to the record of Xuanzang, a royal castle and monasteries were existed on the ground once, however, those relics are not discovered so far. Apart from the caves, only the ruin of a *stūpa* remains in the eastern side of the main cliff.

The records of Xuanzang (AD.629 or 630) and Huichao (AD.727) are the only available documents relating to the chronology of the great sites in Bāmiyān. Those are extremely important as historical sources, which mention not only the state of Buddhism in Bāmiyān but also the climate, the life style of the people, the produces and the politics. With the help of those records, we understand that Buddhism was highly respected in Bāmiyān and was practiced by the king and the commoners. However, from those records we still do not know when the colossal images of Buddha and the caves were created.

So far, the approximate dating of Bāmiyān arts has been examined as a comparative study from the art historical point of view, for when the two colossi, many caves, the mural paintings and the molding images of Buddha were produced. Consequently, we are facing a situation that we cannot make any definite chronology of Bāmiyān arts because of the lack of reliable materials and the discrepancies of opinions.

This time, the radiocarbon dating calibration to the relics from Bāmiyān has been executed for the first time. The total number of samples taken for examination is forty-four in which thirty-three samples of the straw crumbs mixed with the plaster of mural paintings and one sample of wooden joints from the main cliff of the Bāmiyān Caves; six samples of the straw crumbs from the Foladi Caves; two samples of the straw crumbs from the Kakrak Caves; two samples of the straw crumbs from the Dauti Caves. From the results of this calibration, we could obtain some new perspectives of the wide ranged chronology for the Bāmiyān Caves. It has been calculated that the samples are belonged to

the period between around AD. 450 and 850, which corresponds with the findings from the current studies of art history on Bāmiyān and it is very plausible. However, it is inevitable to investigate a particular painting in each cave, observing with the result of this calibration and the studies of art history.

Regrettably many of the important relics in Bāmiyān arts were not included with the samples of this calibration, such as the ceiling paintings in the niche of the Eastern and the Western colossal Buddhas, the interesting mural paintings from three caves with the seated big images of Buddha (i.e. Caves E, H and Ī: although one sample of the straw crumbs from the sidewall of Cave Ī was examined this time). If we collected more samples from the important relics and calibrated them, we could gain further vital information for a comprehensive chronology of the Bāmiyān arts.

This time, samples to be examined were collected from the caves Lower A, Ba, Bd, Ca and its vestibule, Cb, D and its vestibule, D1, Ee, Fa, Fc, Ī, Jb, Jd, Je, Jg, K3, M, Na, Sa, Z1 in the main cliff of Bāmiyān. Samples were also collected from the caves Nos. 2, 4, 5 and 6 in Foladi; Nos. 42 and 43 of the Kakrak Caves. The dating based on the results from the calibration of those samples extends the range of A.D. 450 to 850 which can be divided into three periods: (I) around the middle of fifth century to sixth century; (II) the seventh century; and (III) around the eighth century to the middle of ninth century. Each of the periods can be further divided into two or three sub-periods. The dating of those samples is as follows:

- I (1) From the middle of fifth century to the middle of sixth century : M, Jb, Jd, Je, and Jg
- (2) From the middle to the end of sixth century : Ca, Ca vestibule, and Cb
- (3) From the middle of sixth century to the early seventh century : D1 and Lower A
- II (1) From the early seventh century to the late seventh century : D, D vestibule, Na, and Sa
- (2) From the middle of seventh century to the late seventh century : Fa, Ba, and East III
- III (1) From the late seventh century to the late eighth century : Bd, Ee, K3, and Ī
- (2) From the late eighth century to the late ninth century : Fc(?) and Z1

In this paper, I am going to review the past studies in the art history on Bāmiyān sites, focusing on the chronological issue. And then, I will specifically analyze the results of the carbon dating calibration executed this time with reference from the chronology in the art history.